

深山幽谷の比叡山を白装束の行者が駆け抜けていきま
す。最澄の菩薩僧養成の理念
に基づき相応和尚を始祖とす
る千日回峰行者です。

いでたちは、白麻の淨衣で
ある白装束を身につけて、頭
には前後に長い槍製蓮華笠、
腰には短剣を携えて白手っ甲
をつけ、右手に槍扇、左手に
念珠を持ち、白脚絆に白足
袋、蓮華草鞋を履きます。こ
の姿は生身の不動明王を表し
ています。

深夜2時、自坊を出峰(出
発)した回峰行者は山中の堂
舎から日吉社に詣で、石仏・
霊木など260数力所を巡拝
します。1日は歩く距離30キ
ロ、要する時間は約6時間、
これを7年で千日続けるの
です。その間に、京都市内を
84キロ歩く巡拝も加わり総距
離は約3万8千キロ、地球を
1周する距離に相当します。
いかなる理由であっても行を
中断することは許されず、中
断は自ら命を絶つことを覚悟
してこなくてはなりません。
行法は先達からの口伝で伝
授され、3000日までは素足

の草鞋履きで槍笠を被るこ
とはできません。5000日で御
杖が許され、700日に無動
寺明王堂への堂入りがありま
す。9日間食と水を断ち、不
眠不臥で不動明王に供えるま
さに死と隣り合わせの荒行で
す。その後の京都の社寺を巡
拝する「大廻り」では阿闍梨
さんから頭にお念珠をいただ
く市民の姿があります。満行
されると、北嶺大行満大先達
大阿闍梨と称され、相応の宮
中での加持祈禱にならない、京
都御所へ土足参内して玉体加
持が行われます。比叡山中を
1人、あらゆる神仏と向かい
合い不動明王と一心同体にな
る修行といわれています。

千日回峰の始祖は相応和
尚です。『群書類従』に相応
和尚伝記「天台南山無動寺建
立和尚伝」があります。天長
8年(831)現長浜市の近
江国浅井郡で横氏の子として
生まれ、15歳で比叡山に登

比叡山の千日回峰行



「土足参内」のため京都御所に
向かう千日回峰満行の光永師
=10月12日、京都市上京区・京
都御苑内(柿平博文撮影)

り、17歳で出家。7年間休ま
ず花(シキビ)を根本中堂の
薬師如来に供え続け、その修
行・献花が慈覚大師円仁に認
められ、得度受戒して円仁か
ら不動明王法を授かっていま
す。

25歳で「籠山十二年」の修
行に入り、山岳巡礼の天台回
峰修験の修行を積み出しま
す。29歳、貞観元年(85

9)比良山の安曇川上流の葛
川の三の滝で生身の不動明王
を感得しています。葛川での
修行中、31歳の時、清和天皇
の命により、宮中へ皇后染殿
の病氣平癒を加持祈禱し、相
応の靈験が世に知れ渡りま
す。その後、幾度も宮中で加
持祈禱を行っています。

相応は、宮中も敬意を表す
高僧ですが絹類は身につけ
持祈禱を行っています。

ず、女性裁縫の衣は着ず、牛
馬に乗りず修行坐臥修行を通
じ、延喜18年(918)88歳
で入滅しています。相応の教
えは常不輕菩薩の行、根本中
堂への供花、葛川参籠、不動
明王と山王信仰、加持祈禱と
いわれ、その教えは今も受け
継がれています。

比叡山の回峰行は役行者
(役小角)を開祖とする南山
修験に対して「北嶺修験」と
呼ばれ、修験道的な行法を取
り入れていますが、中世に確
立します山岳修験の修験道は
分けて考える必要があります。
それは千日回峰行はいくら
ろからみられるのでしょうか。
か。平安時代末ごろには百日
参籠や無動寺への堂入りが行
われていたようで、鎌倉時代
に入ると回峰行者の「手文」

類から礼拝修法が少しずつ整
備されてきたことがうかがわ
れます。
室町時代初期の『諸国一見
聖物語』には現在と変わらない
い行者の姿や巡行距離が七里
半(約30キロ)であること、
700日に無動寺への堂入り
でもって満行であること、毎
年、夏と秋に葛川明王院へ7
日間参籠する修行形態を記し
ています。江戸時代初期の
『北嶺行者記』という書には、
元龜2年(1571)の
焼き討ち後の天正12年(1584)
6月には途絶えていた
無動寺溪回峰行を千日をも
つて大行満とすること、葛
川参籠を再開したことの記述
があります。元龜の争乱後に
山中の堂塔が復興されると同
じころに現在の形態になっ
たと考えられています。

1200年を超える天台
宗、懐の深い比叡山で平安時
代から連綿と続けられていた
回峰行、大阿闍梨となられた
のはわずかに49人です。その中
に2千日を満行された酒井雄
哉北嶺大行満大先達大阿闍
梨、平成21年10月12日に満行
された光永國道師がおられま
す。その比叡山では行者道を
歩き回峰行の実践修行に挑戦
する一日回峰行・三塔巡拝が
行われています。

不
動
明
王
と
一
心
同
体
に
な
る

(滋賀県文化財保護協会
葛野泰樹)